

## double cosets の対応と Hecke 環の 指標の対応について

阪大・理 川中宣明 (Noriaki Kawanaka)

### 1. Hecke 環についての一般論

$G$  を有限群,  $H$  と  $K$  をその部分群とし

$$\varepsilon_H = |H|^{-1} \sum_{h \in H} h, \quad \varepsilon_K = |K|^{-1} \sum_{k \in K} k \quad (\in \mathbb{C}[G])$$

とおく.  $\mathbb{C}[G]$  の部分代数

$$\mathcal{H}(H \backslash G / K) = \varepsilon_H \mathbb{C}[G] \varepsilon_K$$

を Hecke 環と呼ぶことにする.  $H=K$  の場合の [1; §11D] の議論を真似て,  $\mathcal{H}(H \backslash G / K)$  の表現についての一般論を作ることができる. ( $\mathcal{H}(H \backslash G / K)$  は, 一般には, 半単純ではないし, 単位元も持たないことに注意.)

以下,  $H$  と  $K$  を固定し,  $\mathcal{H} = \mathcal{H}(H \backslash G / K)$  と置く. また  $\hat{G} = \{G \text{ の既約指標} \} = \{ \mathbb{C}[G] \text{ の既約指標} \}$ ,  $\hat{\mathcal{H}} = \{ \mathcal{H} \text{ の既約指標} \}$  であり,  $\chi \in \hat{G}$  に対し,  $m_H(\chi)$ ,  $m_K(\chi)$  は,  $\chi$  の誘導指標  $1_H^G$ ,  $1_K^G$  での重複度である.

(1)  $\mathcal{H}$  : semisimple  $\Leftrightarrow \mathcal{H}$  が単位元を持つ.

(2)  $\chi \in \hat{G} \Rightarrow \chi|_{\mathcal{H}} \equiv 0$  または  $\chi|_{\mathcal{H}} \in \hat{\mathcal{H}}$

(3)  $\hat{N}$  の任意の元に対し (2) のような  $\chi$  が唯一つあり.

(4)  $x \in G$  に対し

$$\text{ind } x = N\text{-ind } x = \frac{|HxK|}{|H \cap K|}$$

とおく. また,  $[x] = [x]_N = N\text{-ind } x \cdot \varepsilon_H x \varepsilon_K$

とおく.  $H \backslash G / K$  の完全代表系  $\{x_i\}_{i \in I}$  に対し

$$\{[x_i]\}_{i \in I}$$

は  $N$  の  $\mathbb{Z}$ -basis. (構造定数  $\in \mathbb{Z}$ )

(5)  $\chi, \chi' \in \hat{G}$  に対し

$$\begin{aligned} \chi(1) |G|^{-1} |H \cap K| \sum_{i \in I} (\text{ind } x_i)^{-1} \overline{\chi([x_i])} \chi'([x_i]) \\ = \begin{cases} \chi(\varepsilon_H \varepsilon_K) & (\chi = \chi' \text{ のとき}) \\ 0 & (\chi \neq \chi' \text{ のとき}) \end{cases} \end{aligned}$$

(6)  $N$  が半単純  $\Leftrightarrow m_H(\chi) m_K(\chi) = 0$  または

$m_H(\chi) = m_K(\chi)$  が任意の

$\chi \in \hat{G}$  に対し成立.

(7) 任意の  $\chi \in \hat{G}$  に対し  $m_H(\chi) m_K(\chi) = 0$  または

$m_H(\chi) = m_K(\chi) = 1$  が成り立つとする. このとき

(7a)  $N$  は可換

(7b)  $N$  が半単純  $\Leftrightarrow m_H(\chi) = m_K(\chi) = 1$  となる

任意の  $\chi \in \hat{G}$  に対し,

$\chi|_N \neq 0$

$$(7c) \quad \chi(\varepsilon_H \times \varepsilon_K) = \frac{(x v_K^x, v_H^x)(v_H^x, v_K^x)}{(v_H^x, v_H^x)(v_K^x, v_K^x)}, \quad x \in G,$$

ただし,  $v_H^x, v_K^x$  は,  $\chi$  の表現空間における零でない  $H$ -固定,  $K$ -固定ベクトルで,  $(\cdot, \cdot)$  は  $G$ -不変な内積. 特に (7b) と合わせると,

$$\chi: \text{半単純} \iff m_H(\chi)m_K(\chi) = 0 \text{ または } (v_H^x, v_K^x) \neq 0$$

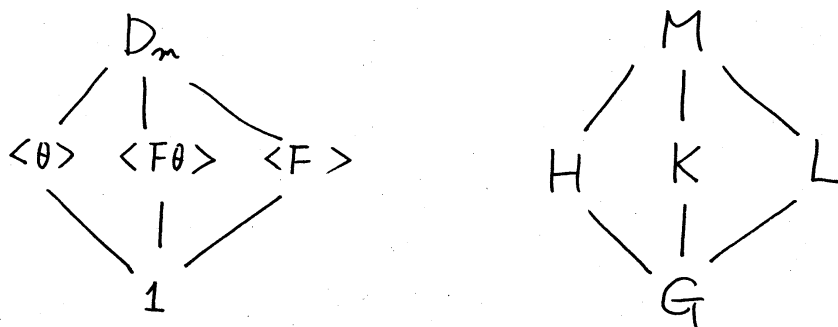
## 2. double cosets の対応

### 2.1. 一般的な枠組み

位数  $2m$  の二面体群

$$D_m = \langle F, \theta \mid \theta^2 = (F\theta)^2 = F^m = 1 \rangle$$

が, 群  $G$  に作用しているとする.  $D_m$  の部分群,  $\langle \theta \rangle$ ,



$\langle F\theta \rangle$ ,  $\langle F \rangle$ ,  $D_m$  による  $G$  の固定部分群をそれぞれ,  $H$ ,  $K$ ,  $L$ ,  $M$  とする.  $\theta(L) \subset L$  であること,  $L$  における  $\theta$  の固定部分群は  $M$  であることに注意しておく. 以下で考えたのは  $H \backslash G / K \rightarrow M \backslash L / M$  のタイプの対応である.

2.2. Glauberman [3] および 新谷 [4] の結果の言い換え  
 $G_1$  を群とし,  $G = G_1 \times G_1$  とおく.  $\alpha$  を  $G_1$  の位数  $m$   
 の自己同型とする.  $\theta, F \in \text{Aut}(G)$  を

$$\theta: (x, y) \longrightarrow (y, x)$$

$$F: (x, y) \longrightarrow (\alpha(x), \alpha^{-1}(y)), \quad x, y \in G_1$$

により定義すると,  $D_m \cong \langle \theta, F \rangle$  となる. 2.1 のように,  
 $H, K, L, M$  を定義する.

例 2.2.1.  $(|G_1|, m) = 1$  とする.  $\{l_i \mid i \in I\} \subset L$  を

$$L = \coprod_{i \in I} M l_i M$$

となるようにすると

$$G = \coprod_{i \in I} H l_i K$$

であり, しかも

$$\frac{|H l_i K|}{|H| |K|} = \frac{|M l_i M|}{|M|^2}, \quad i \in I,$$

が成り立つ. これは, Glauberman の結果の言い換えで  
 ある.

例 2.2.2.  $\mathbb{F}_q$  を元数  $q$  の有限体,  $\langle \alpha \rangle = \text{Gal}(\mathbb{F}_{q^m}/\mathbb{F}_q)$   
 とする.  $\alpha$  は  $G_1 = \text{GL}_m(\mathbb{F}_q)$  の自己同型を引き起こす.

任意の  $g \in G$  に対し

$$H g F \theta(g)^{-1} F(g) F^2 \theta(g)^{-1} F^2(g) F^3 \theta(g)^{-1} \dots H \supset M \ell M$$

となるような  $m$  項  $M \setminus L / M$  の元  $M \ell M$  が唯一つ

存在し,  $H g K \longmapsto M \ell M$  は,  $H \setminus G / K$  から

$M \setminus L / M$  の上への 1対1対応になる. しかも,

$$\frac{|H g K|}{|H| |K|} = \frac{|M \ell M|}{|M|^2} \quad (H g K \leftrightarrow M \ell M)$$

これは, 新谷の結果の言いかえである.

2.3. 奇位数の群, Brauer-Wielandt の結果 [5] との関連

ここでは, 2.1 よりもう少し一般的な枠組みで考える.

$\langle \sigma \rangle$  を位数  $n$  の巡回群とし, 半直積群

$$A = \langle \sigma \rangle \rtimes D_m = \langle \sigma, F, \theta \mid \sigma^n = F^m = \theta^2 = (F\theta)^2 = (\sigma\theta)^2 = (\sigma F\theta)^2 = 1 \rangle$$

を考える.  $A$  が有限群  $G$  に作用しているとする. さらに

$$(|A|, |G|) = 1$$

を仮定する. 特に,  $|G|$  は奇数. よって Feit-Thompson の

定理により可解である.

定理  $\sigma, \sigma F$  による  $G$  の不動点集合を  $G^\sigma, G^{\sigma F}$  と書く.

$\{ \alpha_i \mid i \in I \} \subset G^\sigma \cap G^{\sigma F}$  を

$$G^\sigma = \coprod_{i \in I} (G^\sigma)^{\theta} \alpha_i (G^\sigma)^{F\theta} \quad (\text{disjoint})$$

となるようにとることができる. さらに, このとき

$$G^{\sigma F} = \coprod_{i \in I} (G^{\sigma F})^{\theta} \alpha_i (G^{\sigma F})^{F\theta}$$

および

$$\frac{|(G^\sigma)^\theta| |(G^\sigma)^{F\theta}|}{|(G^\sigma)^\theta| |(G^\sigma)^{F\theta}|} = \frac{|(G^{\sigma F})^\theta| |(G^{\sigma F})^{F\theta}|}{|(G^{\sigma F})^\theta| |(G^{\sigma F})^{F\theta}|}, \quad \sigma \in I$$

が成り立つ。

系として Brauer-Wielandt の位数公式

$$\frac{|G^\sigma|}{|(G^\sigma)^\theta| |(G^\sigma)^{F\theta}|} = \frac{|G^{\sigma F}|}{|(G^{\sigma F})^\theta| |(G^{\sigma F})^{F\theta}|}$$

が得られる。  $m = n = 2$ ,  $\sigma = \text{id.}$  の場合 (Brauer が示した場合) が、特に有名で、よく用いられる (らしい)。

#### 2.4. Frosted-Jensen の結果 [2]

詳細は省くが、2.3 の定理と形式的に酷似した結果を、Frosted-Jensen が、複素半単純リ一群  $G$  と

$$A = \langle \sigma, F, \theta \mid \sigma^2 = F^2 = \theta^2 = (\sigma F)^2 = (F\theta)^2 = (\sigma\theta)^2 = 1 \rangle$$

に対して示している。但し  $\langle \sigma \rangle = \text{Gal}(\mathbb{C}/\mathbb{R})$ ,  $\theta|G^\sigma$  は、Cartan involution である。

#### 2.5. $Sp_{2n}(\mathbb{F}_{q^2}) \setminus GL_{2n}(\mathbb{F}_{q^2}) / U_{2n}(\mathbb{F}_{q^2}/\mathbb{F}_q)$

2.1 の記号のもとで、 $G = GL_{2n}(\mathbb{F}_{q^2})$ ,  $\langle F \rangle = \text{Gal}(\mathbb{F}_{q^2}/\mathbb{F}_q)$ ,

$$\theta(x) = J^t x^{-1} J^{-1} \quad (x \in G, J = \begin{pmatrix} 0 & 1_n \\ -1_n & 0 \end{pmatrix})$$

とする。よって、 $H = Sp_{2n}(\mathbb{F}_{q^2})$ ,  $K = U_{2n}(\mathbb{F}_{q^2}/\mathbb{F}_q)$  (ユ=タリ群),  $L = GL_{2n}(\mathbb{F}_q)$ ,  $M = Sp_{2n}(\mathbb{F}_q)$  である。

定理 任意の  $g \in G$  に対し

$$HgFA(g)^{-1}H \supset M \ell M$$

となるような  $M \setminus L/M$  の元  $M \ell M$  が、唯一つ存在し、  
 $HgK \mapsto M \ell M$  は  $H \setminus G/K$  から  $M \setminus L/M$  の上  
 への 1対1対応になる。しかも

$$\frac{|HgK|}{|H||K|} = \frac{|M \ell M|}{|M|} \quad (HgK \leftrightarrow M \ell M)$$

### 3. Hecke 環の指標の対応

2.2 の 2つの例の場合、 $\mathcal{N}(H \setminus G/K)$  の既約指標  $\chi$   
 の全体と  $\mathcal{N}(M \setminus L/M)$  の既約指標  $\psi$  の全体との間に

$$\begin{aligned} |G|^{-1} \chi(1) \chi([\varrho]_{\mathcal{N}(H \setminus G/K)}) \\ = |L|^{-1} \psi(1) \psi([\varrho]_{\mathcal{N}(M \setminus L/M)}) \end{aligned}$$

を満たすような 1対1対応  $\chi \leftrightarrow \psi$  がある。ただし、  
 $\chi(1), \psi(1)$  は、 $\chi, \psi$  の  $G, L$  の指標としての次数で  
 あり、 $HgK$  と  $M \ell M$  は 2.2 の意味で対応している  
 ものとする。この結果も、新谷と Glauserman の結果の言い  
 換えである。全く同様の結果が、2.5 の場合にも成り  
 立つことが、示される。2.3 の場合でも、 $\chi$  が monomial  
 な指標なら同様の等式が成立するような  $\psi$  が存在するか、  
 一般には修正が必要となる。2.4 の場合は、上記引用した

Flensted-Jensen の論文に, この 9170 の結果が証明されている.

### 文 献

- [1] C.W. Curtis and I. Reiner, *Methods of Representation Theory*, vol.1, Wiley-Interscience, 1981.
- [2] M. Flensted-Jensen, Spherical functions on a real semisimple Lie group. A method of reduction to complex case. *J. Funct. Anal.* 30 (1978), 106-146.
- [3] G. Glauberman, Correspondences of characters for relatively prime operator groups, *Canad. J. Math.* 20 (1968), 1465-1488.
- [4] T. Shintani, Two remarks on irreducible characters of finite general linear groups, *J. Math. Soc. Japan* 28 (1976), 396-414.
- [5] H. Wielandt, Beziehungen zwischen den Fixpunktzahlen von Automorphismen gruppen einer endlichen Gruppe, *Math. Z.* 73 (1960), 146-158.